

2017/2018 平成29年度



アドバイザーとして参加した中森邦男氏は、「長年、社会の関心という点で難しさを感じ続けてきたが、今日の議論を受けて、発想を転換することで道が拓けるという可能性を感じることができた」と総括

シンポジウムで、ともに考える。 障害者スポーツの 社会発信の変化。その意義。

障害者スポーツをテーマとする調査研究活動を開始して丸5年が経過した。前年に開かれたリオパラリンピックでは、日本選手団が金メダル12個を含む合計41個のメダルを獲得し、人々がパラスポーツを伝える報道に接する機会も格段に増えた。何より3年後に東京パラリンピック2020の開催を控え、調査研究活動を開始した当時とは明らかに違った風が吹き始めていた。

11月、ヤマハ発動機スポーツ振興財団は、「障害者スポーツのテレビ放送における社会発信の変化」と題するシンポジウムを東京で開催した。パネリストには太田慎也氏(WOWWOWチーフプロデューサー)、刈屋富士雄氏(NHK解説主幹)、佐藤圭太選手(陸上競技)、若山英史選手(ウィルチェアラグビー)を招き、YMFS障害者スポーツプロジェクトメンバーの小淵和也氏(笹川スポーツ財団 主任研究員)が調査研究の結果を報告した。

報告の中に「NHK総合によるリオ大会の放送時間は(ロンドン大会との比較で)3倍以上増えたが、NHK教育では半減した。これはNHKがパラスポーツを福祉からスポーツへと捉え直したことによるものと考えられる」というものがあった。この変化に佐藤選手は「私が願っているのは『見たことがある』からもう一歩進んだところにある、障害に『なじむ』という社会。人々の心がそのようにマインドセットされていくように、選手は競技力を向上することでより強くメッセージを発信しなければならない。2020年を、その契機としなくてはならない」と思いを語った。

東京パラリンピック2020は新型コロナウイルスの感染拡大により1年延期され、2021年に無観客で開催された。佐藤選手の3大会連続出場は叶わなかったが、競技の様子はテレビやインターネット中継で全国に届けられ、日本選手団はリオ大会を超える史上最多の51個(金13、銀15、銅23)のメダルを獲得した。

天皇陛下の譲位を可能とする特例法が成立し、江戸後期以来、約200年ぶりとなる譲位が決まった。国連では122か国の賛成を得て核禁止条約が採択され、核兵器に関わる活動が幅広く法的に禁止されることになった。この年、陸上男子100mで桐生祥秀選手(東洋大学)が日本人初の9秒台を記録(9秒98)。角界では19年ぶりに日本出身横綱が誕生した(稀勢の里)。

スポーツチャレンジ助成事業

それぞれのステージに合わせて最適な助成を行うため、体験助成にはアドバンスド、ベーシック、ジュニアの3カテゴリーを、研究助成には基本、奨励の2カテゴリーを設定した。この年度に採択した第11期生には、後に世界の舞台で活躍する、フィギュアスケートの紀平梨花選手と自転車競技の梶原悠未選手が含まれていた。



■ 2017年度(第11期生) 助成概要

	申請数	採択件数	助成金額
体験助成	55件	13件	1,203万5,000円
研究助成	42件	15件	1,394万5,900円
計	97件	28件	2,598万900円

スポーツチャレンジ体験事業

■ ジュニアヨットスクール葉山

新年度は36名のスクール生でスタート。低学年には海や自然に親しむことを主眼に指導を行う一方、ジュニア・ユース世代のスクール生は国際大会の運営補助の機会を通じて国際交流を体験した。全国中学選手権では、須永笑顔選手(中2)が女子優勝を果たした。



■ セーリング・チャレンジカップIN浜名湖

過去最多となる全国40クラブから153選手が参加。レーザー4.7級とレーザーラジアル級の2クラスが世界選手権派遣の国内選考を兼ねて行われた。

■ スポーツ教材の提供

全国875校・団体から申請を受け、抽選会を経て125校・団体(被災地支援5校を含む)にスポーツ教材を提供した。また、静岡県西部地域の3市1町の小学校を対象とする「はじめてのタグラグビー教室」は、ヤマハ発動機(株)の協力のもと11校で実施した。



■ 全国児童 水辺の風景画コンテスト

全国から679団体・9,696作品の応募があり、入賞40作品(入選601作品)を決定。大臣賞受賞者は所属校等の協力を得て表彰式を開催するとともに、入賞作品は当財団ホームページや「ジャパンインターナショナルポートショー2018」の会場、ヤマハ発動機コミュニケーションプラザにて展示・公開した。

スポーツチャレンジ啓発事業

■ 第10回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞



【奨励賞】 狩野 美雪 氏
トップ選手の経験を活かした指導で
デフバレーボール日本女子代表を金メダルに導く

■ 調査研究

障害者スポーツを取り巻く社会的環境調査として、新たにテレビCMにおける障害者スポーツの取り上げ状況の変化や、地域現場の実態に着目し、報告書「障害者スポーツの振興と強化に関する調査研究 ～テレビCF、大学の先進的取り組み、地域現場の実態に注目して～」を発行した。またシンポジウムを開催し、約80名の参加者とともに活発な意見交換を行った。